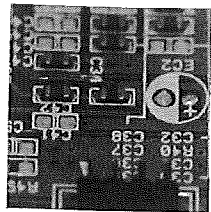


稼ぐには業界通に! 産業翻訳 ジャンル別 徹底分析



日本の製造業の
グローバルな展開を支え続ける

技術翻訳

仕事の基礎知識

何を訳す?

工業技術分野の文書

技術翻訳というとモノづくりに関わる翻訳というイメージがある。

「技術翻訳とは、広義には、一般文書翻訳や出版翻訳と対比するものとして、工業技術分野やビジネス分野全般の翻訳を指しますが、狭義には、IT、電気・電子、機械、自動車、化学などの工業技術分野の翻訳を指します」

日本の製造業が輸出によって成長してきたのは周知の通り。メーカーが海外に製品を輸出する際に必要な文書を英訳するところから、技術翻訳のニーズが生まれた。

「英語が100%の時代もありましたが、生産拠点としてのアジア進出が進んだために、特にここ10年ほどは中国語などアジア言語の翻訳が急増。しかしそれも昨年より変化しています(詳細は左ページ)」

■主な文書

- ・製品マニュアル
- ・仕様書
- ・取扱説明書
- ・技術資料
- ・論文
- ・製品カタログ
- ・技術内容を含むHP
- ・環境関連文書…など

翻訳者の作業環境

TMツールは高頻度で使用

原稿のやりとりは、ほぼ100%が電子データでの送受信。クライアントから受け取ったワードやパワーポイントなど、さまざまな形式の原文データに上書きしながら翻訳する。翻訳後にレイアウトソフトを使ってデザインまで行う場合もある。また、紙の上で編集した指示事項や図面の修正なども、スキャンしてFTPにアップロードすることも。

また、翻訳メモリツール(TMツール/Tradosなど)は、技術翻訳をする翻訳者にはもはや必須だ。

「TMツールは、ボリュームが多くて、改訂版を作る可能性の高いマニュアル翻訳によく利用されます。当社ではTMツールを使うケースは、英日の場合はほぼ100%、日英の場合は約60%です」

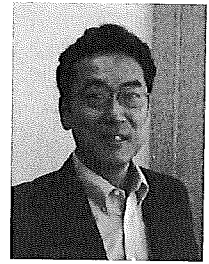
クライアント

メーカー主体

輸出入や海外進出が旺盛な大手製造業全般。家電、重電、パソコン、自動車メーカーなどだ。

「当社のお客様は、海外との取引が多い日本の大手メーカーや外資系IT企業が中心です。また、翻訳する機会の多い製品マニュアルは、以前は分厚い紙のマニュアルでしたが、今では電子化されたマニュアルが主流です。そのため受発注のほとんどは電子データでのやりとりです」

●お話
株式会社
ジェス
コーポレーション
代表取締役
丸山均さん



仕事の特徴

技術者の表現の難解さ

技術文書の日本語が、必ずしも分かりやすい日本語で書かれているとは限らない。多忙なエンジニアが書く技術文書は、推敲がされていない場合もあるという。「対象分野の技術知識を背景に持つ翻訳者が、行間の意味を汲み取って翻訳するよう心がけてはいますが、限界があります。執筆者に問い合わせることもあります」

一方、英日翻訳の場合、アメリカはテクニカルライティングの教育にも力を注いでいるため、日本よりも論理的で読みやすい技術文書が多いと言われてきた。「昨今のグローバル化で企業は新興国でのエンジニアの雇用を急増させています。英語ネイティブではないエンジニアの書く英文を翻訳するケースも増え、一段と難しさを増しています」

必要な能力・向いている人

論理的思考に優れる人

必ずしも理系出身の翻訳者に限定されるわけではない。「高い語学力を持つ人が技術を勉強して“技術翻訳者”になるケースと、語学が得意な元エンジニアが“技術翻訳者”になるケースの2通りがあります。割合としては前者が6割、後者が4割でしょうか。どちらであれ、成功している人の共通項は、“論理的思考に優れ、緻密で真面目で、何よりも翻訳という仕

事が大好き”ということです。日英と英日の両方ができる人もいますが、多くはないという。「当社では日英と英日の翻訳者ははっきりと分けています。ただし、翻訳者は将来の需要の変動に備え、常に日英・英日の両方に対処できるようにしておくことが重要。そのためにはまず日英で十分な経験を積む必要があります」

今、何がおこっているのか？

技術翻訳の最新事情



Q 最近の技術翻訳の需要動向は？

リーマン・ショック後の世界同時不況はとりわけ日本の製造業に深刻な打撃を与えました。日本の上場企業の2009年3月期決算は、非製造業が全体で4兆5000億円を超える利益を出しているのに対し、製造業は8400億円の赤字。中でも売上で全製造業の45%を占める電機機器と自動車・部品の2業種だけで、3兆円を超える赤字を出したのです。まさに戦後最大の経済危機と言っても過言ではないでしょう。

自動車、自動車部品、電気機器という産業は裾野が広く、最大規模の翻訳需要を持つ業種と言えますが、それが

直撃されたわけですから当然翻訳業界にも深刻な影を落としています。大方のエコノミストやシンクタンクの予想通り、おそらくこの不況は、あと1年は続くでしょう。

Q 翻訳会社としての対応策は？

当社の場合、ここ10年近く日本語から外国語への翻訳が仕事の中心を占めていたのですが、リーマン・ショックを境に外需から内需への転換、つまり外国語から日本語へ軸足を移しました。外需、内需、円高、円安、対米貿易、対中貿易……等々、日本経済の針がどちらに振れてもよいように、翻訳会社は常に日本語から外国語、外国語から日本語のどちらにも対応できる体制を整えておく必要があります。当然、取扱言語や取扱分野の拡張にも積極的に取り組まなければなりません。

また、当社では古くから「No.1戦略」をとってきました。「商品のNo.1」と「地位のNo.1」です。不況になればクライアントも売れ筋商品を絞り込み、無駄を排除しようと努めます。しかし、どんなに不況になっても会社の屋台骨をささえる基幹商品だけは排除するわけにはいきません。つまりその会社の基幹商品に関わる翻訳需要をがっちり掴んで離さないようにすることがです。それにより多少仕事量が減ることはあっても、無くなることはありません。

もう一つは出入りの翻訳会社の中で常にNo.1の座をキープするよう努

めること。例えばあるクライアントに5社の翻訳会社が入っていて、不況で3社が切られたとしても、No.1の仕事量が極端な変化はありません。

Q クライアントの動向は？

日本の鉱工業生産指数が今年3月に底を打ち反転したのはよいのですが、まだまだ水面下からは抜け出せていません。翻訳会社から見たクライアントの景気実感も、同様の思いです。二番底を懸念する声や集中購買(*)の動きもあり、予断を許しません。

Q 今後有望な言語や分野は？

よく言われているように環境を意識した新エネルギーや医学、薬学、バイオ、医療機器等々は将来有望なはずですが。また、長い目で見ればやはり知的財産関連の翻訳もまだまだ伸びる余地はあると感じています。

また、言語では一番の有望株はベトナム語でしょうが、中国語もさらに伸びる可能性は十分あると考えます。

Q 技術翻訳の将来性は？

GDP比でいくと日本の研究開発費は世界一だとか。日本の技術が高いレベルで維持されるかぎり翻訳需要が減ることはないでしょう。しかし一方で日本企業がインドで設計した新製成品を中国やベトナムで製造し、アメリカやEUへ輸出するという時代がきています。今後は中国や韓国で設計した新製成品をメキシコで製造し、ブラジルへ

輸出するケースもありません。そこに日本語という言語は介在しません。こうした翻訳需要を日本の翻訳会社がどのくらい捕えられるかが今後のポイントになるでしょう。

COMPANY DATA

(株)ジェスココーポレーション

1964年設立の翻訳会社。創業時より、技術翻訳に注力。大手メーカー多数をクライアントに持つ。「JES技術翻訳学院」も開講中。

神奈川県横浜市西区北幸2-10-36

横浜西口SIAビル 8F

045-313-3721

<http://www.jescorp.co.jp/>



気になる Key Word

●集中購買

本社と複数の事業所や工場を有する企業において、資材の調達を本社で一括して行う購買方式のことを指す。

「世界的な規模で大型合併が進んでいる理由の一つがこの集中購買です。例えば、今まで部品メーカーに年間1万個の部品を発注していた会社が、合併して巨大になり、100万個の部品を発注できるようになった。『だから単価を5割下げて欲しい』とか、今まで10社に発注していた仕事を3社に絞るから、『その代わりに単価を5割下げて欲しい』とすること。装置産業に有効な手法が翻訳業にも通用するかどうかは今後の注目点です」